

善光寺と日本人

袖 山 榮 眞 (そでやま えいしん)

東京都立大学名誉教授・長野市 浄土宗十念寺住職

1. はじめに

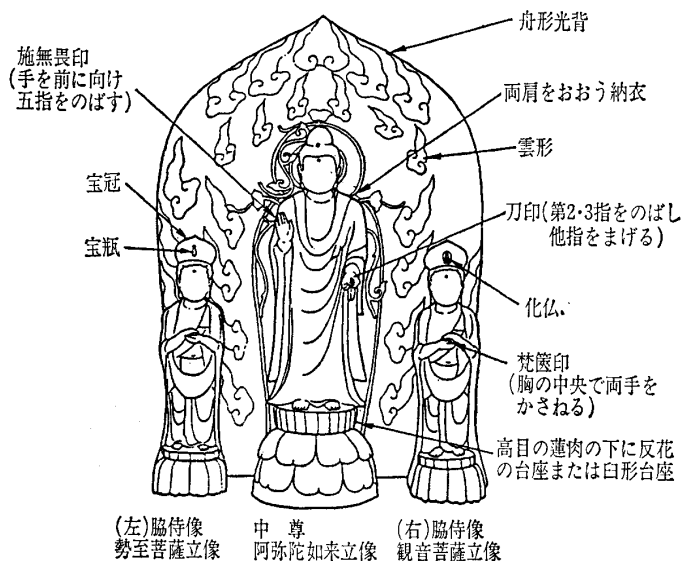
今年は7年に1回の「ご開帳」とあって、4月7日から50日間に388万の参詣人が善光寺を訪れたといわれているが、平年であっても年間500万人を下らぬ善男善女が全国から雲集するのは何故だろうか。このような素朴な疑問に対する解答として「善光寺聖」の存在が力説されるようになって既に久しい。

秘仏とされる善光寺本尊は『善光寺縁起』（以下『縁起』と略記）その他に「身長1尺5寸（45.5 cm 弱）」と記され、左右の約30 cmの両脇侍を一枚の光背に収めた、いわゆる「一光三尊」の比較的小型の尊像であるから、この複製を背負って諸国を遍歴する「聖」が発生しても別に異とするに足りない。『善光寺・心とかたち』（第一法規）に下平正樹氏は、このような模造が「優に二百を越す例があり、北は北海道長万部から、南は四国の徳島県・九州大分県に至るまで今日その所在が知られている」と記し、『長野』第108号で小林計一郎氏は全国の「善光寺という寺名を持つ寺（通称を含む）」「善光寺式三尊仏を本尊とする寺」を調査し、229例を確認している。全国隈なく張り回らされた「新善光寺」網によって津々浦々まで浸透した「善光寺信仰」があったればこそ、50日間に388万の動員が可能になったという事になるが、これは飽くまでも結果論にすぎない。なぜなら如来のレプリカを遠隔の地まで背負って伝えた「聖」たちの願いは、信州善光寺への参詣人を増加させることではなく、一生に一度の善光寺詣りも叶わぬ地域に如来の「分身」を齎すこと^{もたら}にあったのだから…。つまり新善光寺網によって善光寺信仰が醸成されたのではなく、善光寺信仰によって新善光寺網が形成されて来た一と見るべきであって、『縁起』に記される最古のレプリカが模造される建久6

年（1195）より4年前に源頼朝の命により善光寺の再建が行われていることをもって、その証しの一つとすることができる。

2. 「印相」のもんだい

上記建久6年の模造に関して注目すべきことが少なくも二つある。第1はこの像が「等身」と明記されていること。第2はその「印相」である。上述の中尊の身長50 cm 弱という規範を大きく逸脱して150 cm 前後ということになるが、現在の甲斐善光寺本尊こそ、左脇侍足柄の刻銘「建久六年乙卯」および147 cmという身長に鑑みて『縁起』に伝えられる模造仏に比定される。この中尊の左手は通例のごとく指先を下にむけず、掌を上に向ける異例の「印相」を示すのである。『縁起』に伝えられる模造はもう1例ある。承久3年（1221）鋳写と記されるこの像は「御身長一尺5寸許。右御手施無畏印。肩等持。御指端微屈給。左御手如刀印。大指垂名指相去二分計持之」筈であるが、傍点箇所^に明記されるとおり、



図一 善光寺式三尊像の特徴¹⁾

特別講演

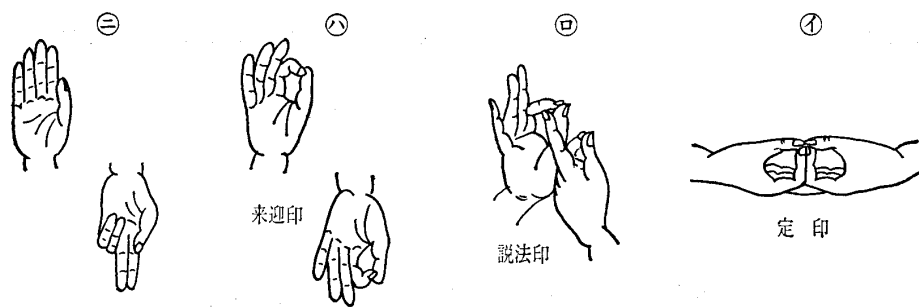


図-2 印 相

長野

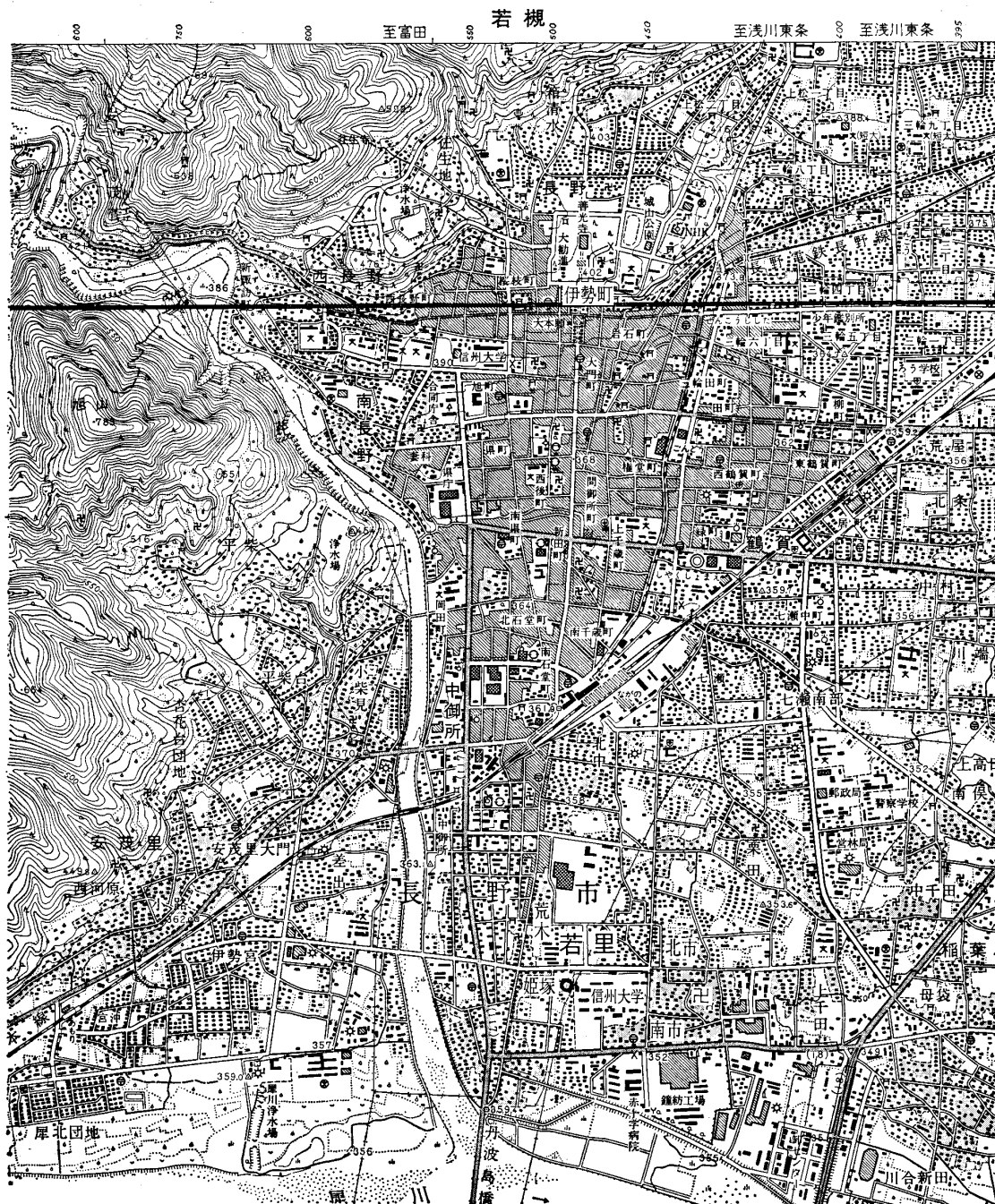


図-3 長野市中心部²⁾

親指と薬指との間が6mmほど離れているので、一般的なレプリカ(図-1)とは異なり、図-2の㊦あるいは法隆寺金堂の釈迦三尊中尊の印相との近似が推測されるのである。

ところで、この点について興味深い記事が『古今著聞集・巻第二』(1254成立)に見られる。源平合戦の戦火で焼亡した東大寺大仏殿再建の落慶供養参列を名目に建久6年(1195)源頼朝は大軍を率いて上洛し2月から7月まで滞京するのだが5月20日に難波の四天王寺に参詣する。当時この寺の別当職にあった鳥羽宮に次のような述懐をしたというのである。「善光寺の仏礼し奉る事二度なり。その内初めは定印にておはしましき。次の度は来迎の印にておはしまし候。すべてこの仏、昔より印相さだまり給はぬ由申し伝え候へども、まさしく証を見奉りて候ひし」とあり、「善光寺の本尊如来が一度は図-2の㊦の印相、もう一度は㊦の印相だった。この仏の印相は千変万化するという昔の言い伝え通りだった」というのである。そのような「言い伝え」があったとすれば、初期のレプリカの中に図-1のモデルを逸脱するものがあっても別に怪しむに足りない。

ここで視線を足許に向けてみたい。この会場は図-3の下辺近く「若里」と記された地域に属している。『長野縣町村誌』によれば「本村古時水内郡芋井郷に属す、後市村庄若月の里と云ふ。市村、荒木村たり。明治九年四月合併して一村となり若里村と改称す」とあり、図-3に「北市・南市・荒木」の小字名が見られるとおり、犀川の渡し場に「市」の

立つ村として形成された経過が窺われるのだが、古来この村に護持されているのが「国中無双」と称される「綱曳阿弥陀如来」である。『佛導寺縁起』によれば、熊谷次郎直実の息女玉鶴姫を対岸まで導き給うた善光寺如来のお姿を、直実(出家して蓮生法師)が自らのみをとって彫り上げたもので、図-4ほどに整備されてはいなかったろうが、綱を頼りに行われた往時の操舟技術に立脚した造型で、いわゆる善光寺仏とは似ても似つかぬお姿だが、それでも「善光寺如来」の分身であることに変わりはない。父と娘の邂逅が事実であるとの確証はないが、甲斐善光寺に伝わる鎌倉時代末期の木造蓮生法師坐像の存在は、単なる状況証拠以上の重みを感じさせるもので、ついでながら会場の西に聳える大木は蓮生自ら娘の塚に植えた樺と楓の名残り⁴⁾と伝えられ(姫塚)、若里の語源「若月の里」も「若楓の里」の転訛とも見ることもできる。

本題に戻るとして、「昔より印相さだまり給はぬ由申し伝え候」という頼朝の言葉を裏付ける事例がこれほど多いにもかかわらず、奇妙なことに『古今著聞集』の問題の箇所以外に、善光寺如来について同じ特徴を指摘する資料は皆無なのだ。逆にほとんどあらゆる資料に共通するのは「生身の如来」「生身の弥陀」という特質であるが、一見無関係のようなこれらの特徴と特質とは実に表裏一体を成すものであって、「生身」であればこそ「印相」が時と処に応じて千変万化するのである。玉鶴姫の前に出現した渡し守りはもとより、建久6年の定尊の場合も、

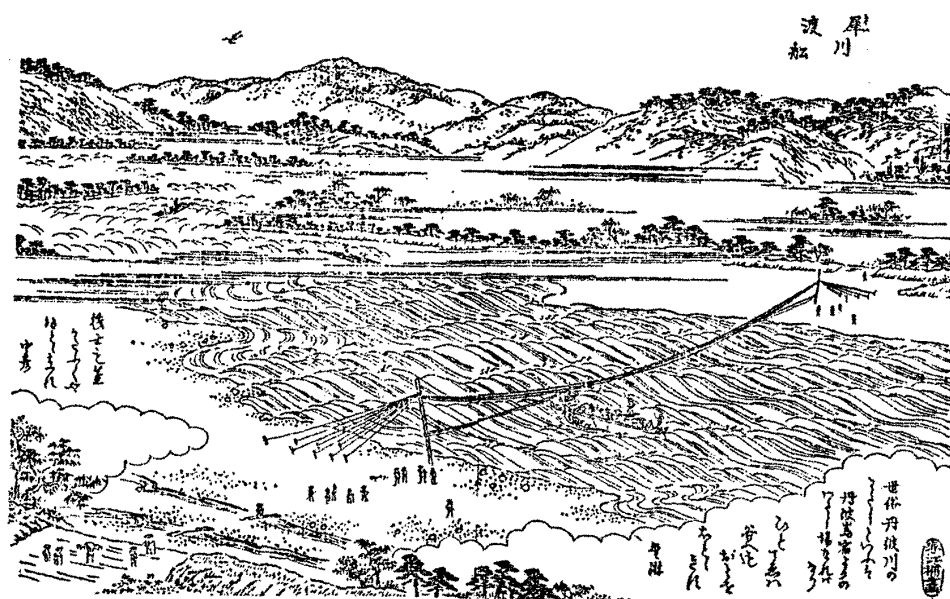
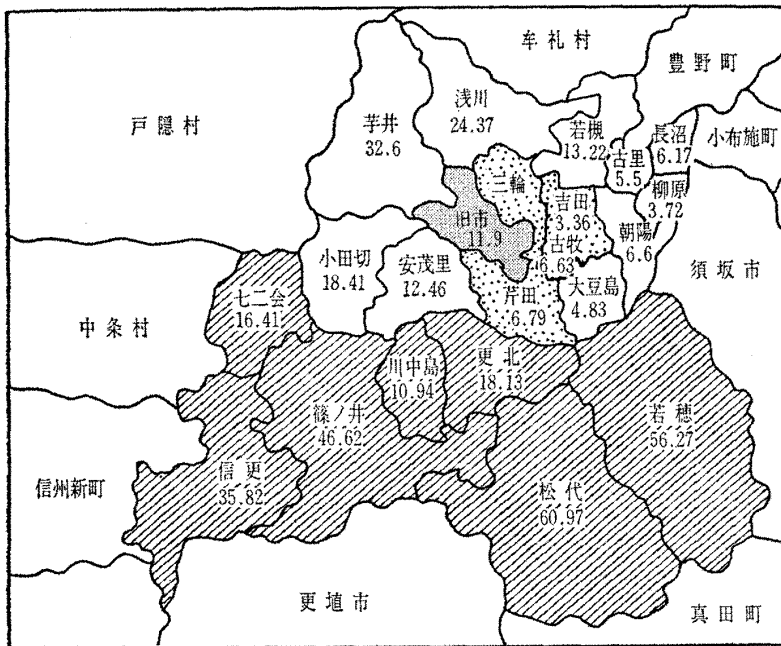
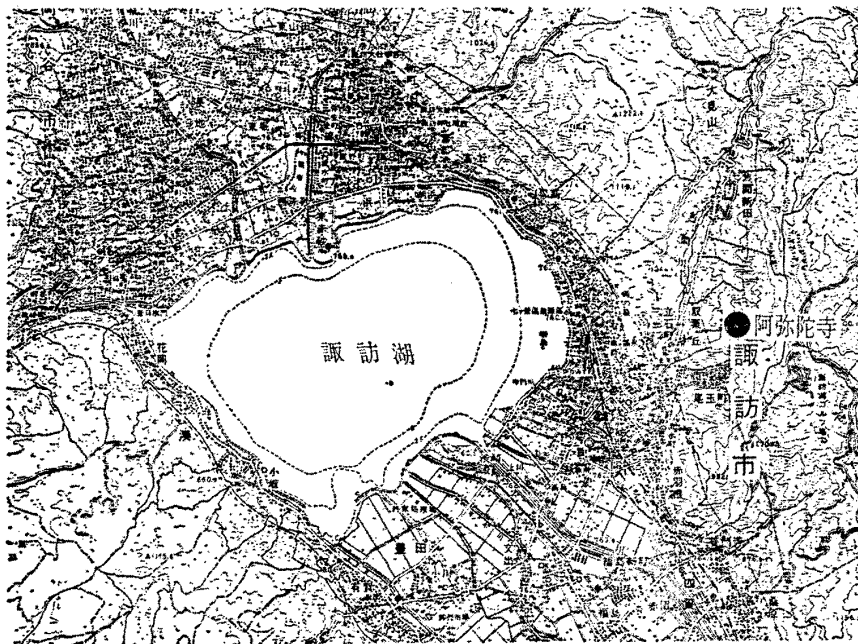


図-4 犀川の渡し場⁴⁾

特別講演

長野市域の拡大(数字は面積 km²)

図一5 長野市域の拡大するようす



図一6 阿弥陀寺と諏訪湖

承久3年の浄蓮の場合も「霊夢」の中に出現した如来のお告げによって、「鑄写」が行われているという記述も、「生きた如来」の存在を前提としている。つまり遅くとも12世紀までに広く流布していた「善光寺には生身の弥陀がおわします」との信仰が、諸国から参詣者と巡礼とを惹きつけ、その巡礼の中からレプリカを諸国に招来する「善光寺聖」が発生した一と考えるべきである。

善光寺の本尊が「欽明天皇13年(552)に百済の聖明王から贈られた」と『日本書紀』に記される仏像であると日蓮も確信していたことは、建治3年(1277)の書簡で「あれは釈迦如来であって、阿弥陀如来である」との非難からも明らかで、釈迦如来か阿弥陀如来かの点だけを別にすれば、『縁起』に記されるとおりの故事来歴が広く支持されていたことを示すものだ。

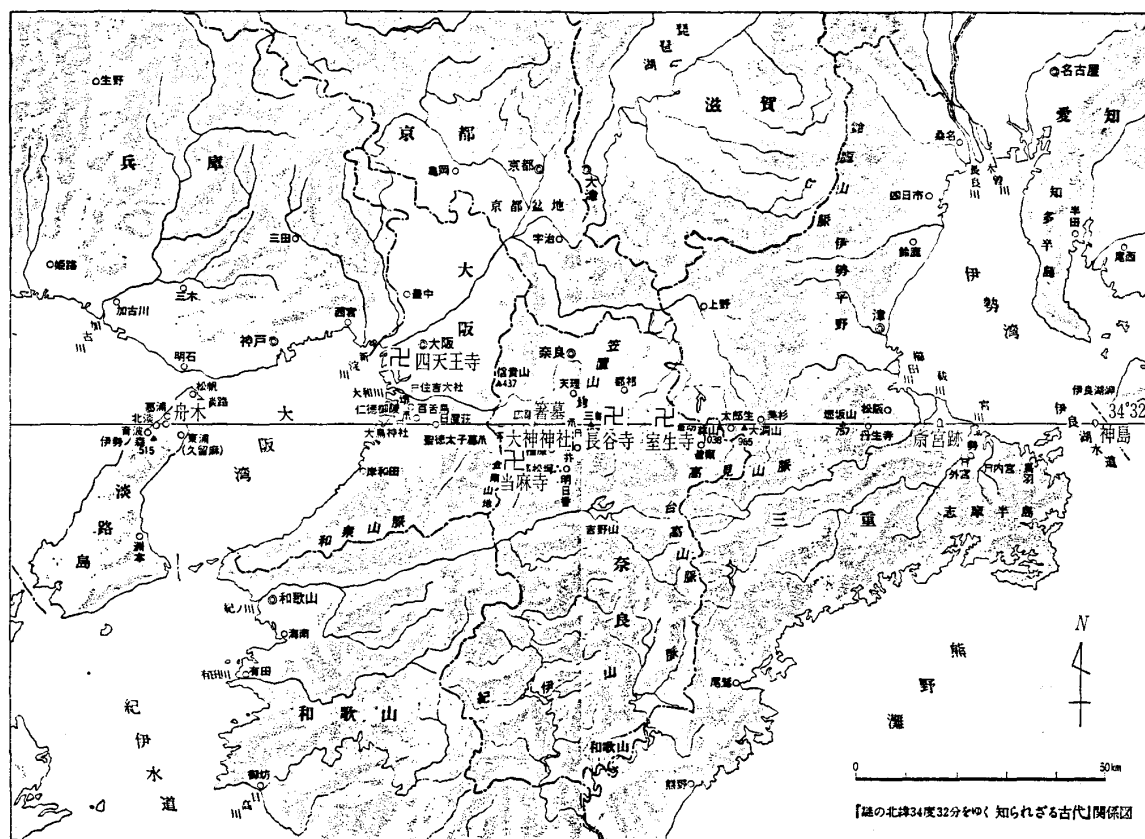
3. 「日迎え」「日送り」と「日想観」

ことしの5月22日、奈良県立橿原考古学研究所は当麻町染野で日本最古の弥勒仏像が出土したことを発表した。『当麻曼荼羅縁起』に記される『染寺』伝説が単なる伝説ではないことが立証されたのである。や

やもすれば「荒唐無稽」と片付けられ兼ねぬ「寺社縁起」の記述の中に、厳然たる事実も秘められているのだ。『善光寺縁起』の場合、承久3年レプリカ鑄写の浄蓮が秘かに語ったという言葉に注目したい。「善光寺東西南北四十里内。皆黄金結界淨土。内外明徹表裏照耀。夢見給」というのだ。

諏訪湖の東の唐沢山に阿弥陀寺という寺がある。縁あってある夏この道場で数日を過ごした。道場より更に高く諏訪湖を一望に収めるところに小さなお堂がある。そこから見た落日の光景—湖全体が巨大な黄金の盃に変化する—を彷彿とさせるのが、

上記浄蓮の述懐である。聞けば唐沢山は古来諏訪盆地の人々にとって一つの霊地で、春秋の彼岸には新亡の白木位牌をこの寺に納める慣習があるという。図一6に示されるとおり、陽が真西に沈む春分秋分の落日は、湖の真東に位置する阿弥陀寺から見ると、最も広い湖面を照らし、最も荘麗な黄金の盃を現出させるはずである。ここは古代人に「日迎え」「日送り」の聖地として選ばれるのに最も相応しい自然条件を備えている。今日では「到彼岸」の省略とし



図一 7 紀伊半島を横断する北緯34度32分線⁹⁾

てのみ語られる「彼岸」が、実は「日迎え」の転訛ではないかという民俗学の主張に、原始日本人の心情と伝来した仏教々理との絶妙なる接点を見出すことができるのであって、日本全国にこのような「霊地」が散在していたのだ。

写真家小川光三氏の『大和の原像—古代祭祀と崇神王朝』に触発されて NHK ディレクター水谷慶一氏が辿った「太陽の道」が図一7のほぼ中央を横断する北緯34度32分の直線である。神島から淡路島の舟木に至るこの直線上に斎宮、室生寺、長谷寺、大神神社、箸塚などの社寺古墳を初め、明らかに古代祭祀の痕跡をとどめる磐座が点々と続き、更にそのような地点から西北西三十度、西南西三十度の地点にも同じような社寺古跡が存在し、しかも春分秋分、もしくは夏至冬至に何らかの儀礼の伝えられる例が多いとの発見は、太陽の運行に対する古代日本人のなみなみならぬ深い関心と、そのような情念と外来宗教との微妙な接点の存在を如実に物語るものである。

ところで、紀伊半島を横断するこのベルト地帯の西部に「生身の如来」の伝説にまつわる古寺が二つある。二上山の東麓に位置する当麻寺と、難波の海

に臨む四天王寺である。前記『当麻曼荼羅縁起』には「生身の如来を見奉らずば、この寺門を出でじ」と誓った中将姫の前に尼僧に変身した阿弥陀如来が影向し、蓮の糸で彼の有名な曼荼羅を織り上げる次第が語られ、『四天王寺縁起』には、「斯処昔釈迦如来転法輪所、爾時生長者身供養如来助護仏法以是因縁起立寺塔……宝塔金堂相当極楽土東門中心……」とあって「前世において聖徳太子が長者だった時、釈迦如来がここで説法をした霊地である」ということと「金堂・五重塔の一直線上に極楽浄土の東門が開く」霊域であることが強調されている。かつて折口信夫は『山越しの阿弥陀仏像の画因』において、原始日本人の「日迎え」「日送り」の行事が二上山の彼方に「山越しの弥陀」を見る行法を生み、更に「釈迦如来転法輪処、当極楽東門中心」と大書された扁額のかかる四天王寺西門の石の鳥居の彼方の海に沈む夕日を観ずる「日想観」に昇華する過程をたどりつつ、渡来文化がいつしか我が国生得のものとなりかわっている具体例を示したが、当麻寺と四天王寺という二つの霊域が、一つは二上山の間に沈む夕日、もう一つは難波の海に沈む夕日という二つのパターンを示しつつ、その地に「生身の如来」の存

特別講演

在を力説するのは注目に値する。『観無量寿経』が説く第一の観法「日想観」が西の空に沈む夕日を凝視する行法を日本に伝え、かつて山の端もしくは水平線に沈む夕陽を見送るのに適した霊地として選ばれていた地域が、光明にあふれた阿弥陀仏の浄土を目の前に見る—もしくは巍々として輝く阿弥陀仏の真身（謡曲「当麻」「柏崎」に「正身の弥陀如来」と記されているのも、あながち「生身」の誤記とのみ見るべきではあるまい）を身奉る条件の具足された仏域として選択されて行くのだ。

本多善光に背負われて難波の堀から信濃路に向かった善光寺如来が、一度は善光の故里たる伊那郡宇招村麻績里に安置されてから41年、再度の託宣によって水内郡芋井郷への遷座が行われるという『縁起』の記述の背後には、このような霊域を転々としつつ最適の地を求めて、あるいは100年、200年という年月にわたって遍歴の旅を続けた可能性も窺われるのである。兎も角安住の地として選ばれた地形が「当麻寺タイプ」に属することはほぼ疑う余地がないと思われる。草創期の如来堂が図一3上辺近い横線上、「伊」の字あたりに東面していたならば、春分秋分

の夕日は如来堂の大屋根の彼方の山の端に真直ぐに沈んだはずである。

筆者の母は明治38年生まれの長野育ちだが、大正時代も末期に至るまで、市内近在の住民は春秋の彼岸には善光寺に参詣するのみで、菩提寺や墓に詣でる習慣は無かったという。1000年に及ぼんとする歳月にわたって当然至極の習俗として重ねられて来た彼岸の「日想観」が、実際に行われなくなった後になっても、その霊域に人々の足を向けさせていたのであろう。今回の学会に全国からお集まりになった諸先生がたに、同じような習俗の痕跡の伝えられる土地についてのご教示をいただければ幸いである。

図の出典

- 1) 図一1 長野市立博物館『善光寺信仰』展パンフレット (1985.4/5~5/26)
- 2) 図一3 国土地理院5万分の1地図「長野」,(縮小)
- 3) 図一4 長野放送編:善光寺かいわい, 銀河書房, 1991.4/19, 57ページ
- 4) 図一5 長野放送編:善光寺かいわい, 付録4ページ, 銀河書房, 1991.4/19
- 5) 図一6 国土地理院5万分の1地図, 諏訪,(縮小)
- 6) 図一7 水谷慶一:知られざる古代, NHK出版, 1980.2/15, 見開き

(原稿受理 1991.8.23)